2025 Winter Vol.311

ラボの世界

THE WORLD OF LABO

01 10代とともに　～つなげるデザイン 切手でつながる
04 ラボ国際交流50年記念　交流のエピソード
05 地平線白書　2025夏のラボ国際交流
・北米交流，ニュージーランド交流，オレゴン国際キャンプ，韓国交流
・北米青少年受入れ，日本語研修生受入れ，中国青少年受入れ
09 2025 S4-H Fall Coordinators' Conference 報告
理事会・評議員会報告
10 東京言語研究所コラム　～文法と意味，文法の意味
11 Go Ahead!　～岐阜県・脇田雅美氏
Information

蒲沢咲希（中2／東京都・中村かおるP）
ホストファミリーとブルーベリー狩り
早朝でとても寒くてみんなで手が赤くなってしまったけど，とても楽しかったです。――アメリカ・ミシガン州

Labo International Exchange Foundation
Rowing to Another Dawn
Since 1973

10代とともに

貝淵純子

Kaifuchi Junko

日本郵便株式会社 郵便・物流事業統括部 切手・葉書室 指導役。2005年に日本郵政公社（現 日本郵便株式会社）へ入社。切手デザイナーとして，「普通切手・通常葉書（2014-2023）」「郵便創業150年切手帳（和紙シール式切手）（2021）」「自然の風景シリーズ（2021-2023）」「ライフ・花ー竹久夢二の花図案ー（2022）」「伝建制度創設50周年（2025）」など，800種以上を担当。

つなげるデザイン 切手でつながる

日本の切手はすべて，日本郵便本社にいる８名のデザイナーがデザインしていて，貝淵さんは長年に渡りそのチームのリーダーとして活躍され，現在は指導役という立場で関わっておられます。切手デザイナーになるまでの，決して順調なことばかりではなかった道のりを話してくださいました。

幼いころから絵を描くのが好きでした。みなさんは「蝋石」って知っていますか？　アスファルトに絵を描くことのできる石です。それを使って，夢中になって道路に絵を描いて遊んでいたのを覚えています。それから，郵便受けに入っているチラシをひっくり返して，裏面が白紙だとよろこんでそこに絵を描いて遊んでいました。

「マンガ家になりたい」と思ったことはありましたが，美術の道に進もうという発想はありませんでした。しかし，今ふり返ると，高校の選択科目で「音楽，美術，書道」のなかから美術を選択したことが，切手デザイナーへの道につながる第一歩だったと思います。私は当時，合唱部に所属していて，うたを歌うことが大好きでしたし，字を書くことも好きだったので，どの科目にするかとても迷いました。でも，幼いころから絵を描くことが好きだったので美術を選択しました。授業を受けていたある日，私の絵を見た先生から「あなたは美術大学を受けないの？」と言われ，「先生がわざわざ声をかけてくるということは，私には才能がある」と思いこみ，そのことがきっかけで美術の道に進みたいと思うようになったのです。あのとき音楽や書道を選んでいたら，切手デザイナーになることはなかったと思います。

所属していた合唱部を辞めて美術部に入り直し，東京藝術大学の日本画学科への入学をめざして，学校外の絵の研究所にも通いはじめました。現役合格のために勉強しましたが，結果は不合格。高校を卒業してからは，アルバイトをして研究所の費用を稼ぎながら勉強しました。勉強に専念していたので成人式も欠席しました。今思えば，出席しておけばよかったなと少し後悔しています。浪人生として過ごしていた期間は，いつ合格できるかわからず，先が見えないという不安を抱えていましたが，そのころに苦楽をともにした仲間とは今でもつながっています。その点では，苦しい時期を過ごした価値があったと思うことができます。

その後，４度試験を受けましたが，東京藝術大学の試験に合格することはできませんでした。学費のことも考え，私としては国立の大学に入学したかったのですが，両親から「私立の美術大学も受けてみたら」と言ってもらえたので，22歳で武蔵野美術大学を受験し合格しました。そして武蔵野美術大学に通い卒業したのですが，大学在学中も東京藝術大学への想いはおさまらず，受験を続けていました。卒業後にも受験を重ね，合計で10回近くも受験しました。しっかりと気持ちを切り替えて，自分の絵にむきあうべきだったのでしょうが，あのころの私はあきらめきれなかったんですね。

武蔵野美術大学を卒業するころになっても，私は就職活動をしませんでした。「絵描きになる」と決めていたので，卒業したあともアルバイトをしながら絵を描くという生活を送っていました。大学在学中に美術の教員免許を取得していたので，教室で子どもたちに絵を教えていたこともありました。そんななか，郵政省で働いていた同級生から「外部デザイナーのコンペを受けてみないか？」と誘われたのです。

現在は８名で切手をデザインしていますが，当時は５名くらいしかいなかったので，忙しいときには外部のデザイナーに声をかけていたようです。デザインする対象は切手だけでなく，「年賀葉書」や「夏のおたより郵便葉書」などもありました。なんどか私のデザインが採用されているうちに，切手デザイナーの職員募集があったため，応募してみることにしました。これまでのお付き合いはありましたが，ほかの応募者と同じように実技や面談をし，当時の日本郵政公社に入社することになりました。45歳のときの話です。

仕事としての美術

お話ししたとおり，大学を卒業してからこの仕事を始めるまで約20年の歳月がかかったわけです。在学中は，日本がバブル期だったこともあって「絵を高く売って，絵描きと

10代とともに

して成功するんだ」と思っていましたが，現実はそう甘くはありませんでした。もしみなさんが美術の道で就職も視野にいれるのであれば，デザイン科を専攻することをおすすめします。私のいる切手・葉書室のデザイナーもたいていがデザイン科を卒業しています。私は日本画を学んできたので，写実的に描くのは得意だと思っていますが，多くの仕事にはデザインのセンスが求められます。なので，就職を考えるのであれば，デザイン科出身のほうが間口がひろがるのではないかと思っています。もちろん，何を学ぶかは最終的には自由ですけどね。ちなみに私の息子も美術の道に進み，建築を学んでいます。結局，自分の道は自分で選ぶということなのかもしれません。

切手デザイナーの日常

私の場合，切手のデザインを職場で考えるということはあまりしません。仕事の時間のなかで発想するのが意外と難しくて，家でぼんやりと考えたりすることもあります。いちばん多いのは，通勤の時間です。私は乗り物酔いしやすいので，電車の中で本を読んだりすることができないため，外の風景を眺めながら「今度の切手のデザインはどうしようかな」と考えていることが多いです。何か思いついたら，職場や家に着いてすぐにメモをとるようにしています。10代のみなさんはスマートフォンにスケジュールやメモが入っているのでしょうけど，私はずっと手帳を使っています。そこにデザインのアイディアなどたくさん書きこんでいます。実際に絵を描くということもたいへんですが，デザインの方向性を決めるというのも，なかなかたいへんなことです。なので，デザインについて，いつも頭のなかで想像しています。

８名のスタッフのなかでも若い人たちは，とくにリサーチに時間をつかっています。とにかくいろいろなものを調べて見にいく。インターネットで調べて画像を見ることもできますが，足を運んで実物を目の当たりにするほうが，得るものが多いと感じています。若いデザイナーはほんとうに行動力があると関心しています。

世界に誇れる切手を

大前提として，切手は郵便料金の前納を示す証紙です。金額の数字が書いてあれば，問題なく機能しますから，もしかするとデザインなんて必要ないかもしれません。ですが，記念切手のように特別にデザインされている切手を貼っている郵便物と，そうでない郵便物を比べると，前者の郵便物が届いたほうが，長く部屋に飾っておいてもらえるというデータがあります。ですので，郵便物を受けとった人が，ちょっと部屋に置いておきたいと思えるような，気に入ってくださるデザインにしたいなと日々願いながら仕事をしています。

みなさんは英語を学んでいますよね？　英語を話すことができれば，異なる文化のなかで生活する人々と話をすることができます。それはとってもすてきなことだと思います。じつは切手も「小さな外交官」と呼ばれています。その国の文化や歴史，風景などが描かれるので，ほかの国のことを知ることができる良い資料になるからです。切手はとても小さいですから，持ち運びも容易にできるので，異文化交流にひと役買うことが多いんですね。こういうところも切手の重要な役割だと思っています。

切手のデザインには制約も多いです。切手が貼られたハガキや封書は，郵便局の機械でものすごい速さで仕分けされ，全国各地の届け先に届きます。切手に不具合があると，機械ではじかれてしまい，会社の仲間に迷惑をかけることになってしまいますし，もしかするとハガキを出した人や受け取る人にも迷惑をかけてしまうかもしれません。なので，数ある制約をしっかり守ってデザインするというのも，とてもだいじなことなのです。

私たち切手デザイナーは，作家ではあません。「自分のやりたいことを表現するんだ！」ということではなくて，日本郵便の一員として，多くの制約を守りつつ，世界に誇れる切手をつくる仕事です。

というわけで，もともとは日本画家をめざしていた私も，今は切手デザイナーになっています。ほかのスタッフも同じように，作家をめざしていた人もいるわけです。なので，プライベートで好きな絵を描いたり，この間は「デッサンするために石膏像を買いました」なんて話してくれたスタッフもいましたよ。みんな，仕事以外の時間をつかって絵本の勉強をしたり，写真の勉強をしたりしているようです。表現することが好きなメンバーが集まっていますね。私自身は，今は仕事のことで頭がいっぱいなので，この仕事を退職したら，また日本画をゆっくり描こうと思っています。

しっぽは切らないで

切手のデザインには，切手・葉書室のデザイナーがオリジナルで描くものもあれば，そうでないものもあります。「ドラえもん」や「ポケモン」のようなキャラクターもあれば，絵本をモチーフにしたものもあります。

「ぐりとぐら」をはじめて採用した切手も，私が企画しました。まずは，会社に企画をプレゼンテーションするところからはじまります。しっかりと「ぐりとぐら」の魅力を伝えなければ企画が通らないので，何年前から売れ続けているか，子どもたちにどのように愛されているかなどを調べ，会社に納得してもらえるようプレゼンテーションをおこないました。ぶじに企画が通り，発売されると反響が大きく，とても喜んでもらえたので，現在発行されている「絵本の世界シリーズ」にもつながったのだと思います。

10代とともに

制作過程で，「ぐりとぐら」の絵を描かれている山脇百合子さんとも直接お会いすることができました。山脇さんに絵を使用する許諾を得るためにうかがったのですが，その際「ぐりとぐらのしっぽだけは切らないでくれれば，あとは何をしてもいいわ。しっぽを切ったらかわいそうだから」とおっしゃいました。まっすぐのびたしっぽを切らないようにデザインするのは難しかったので，「しっぽを曲げるように描きなおしてもいいでしょうか？」とお願いしてみると「いいわよ」と快諾してくださったのを覚えています。自分で描いた絵を描きなおさせてくださる作家さんはなかなかいないのですが，「しっぽが切れたらかわいそうだ」という，愛にあふれていて，とてもすてきな方でした。

このシリーズでは，山脇さんだけでなく，絵本の出版社である福音館書店の方々にもたいへんお世話になりました。切手デザイナーの仕事は，ひとりでできるものではありません。ほんとうにいろいろな方と協力して一枚の切手がつくられているのです。

自分が決めたこと

人とのつながりは，ほんとうにたいせつだと思います。10代のみなさんには，「何かに失敗しても絶望することはないよ」ということを伝えたいです。私は，ほんとうに行きたかった大学に入学することはできませんでしたが，合格した大学で出会った人とのつながりによって，今の仕事に就くことができました。私は，「このアルバイトしてみない？」とか「これやってみない？」と声をかけられたことに対して，断ったことがないんです。それによって，いろいろと経験することができたのだろうと思います。失敗したそのときには，未来がどうなるか，この失敗が自分にとってどんな影響をもたらすかというのはわかりません。なので，しばらくは落ち込んだり悩んだりしてもいいと思いますが，ひと呼吸おいて，あとは流れに身を任せてみるというのも良いのかなと思います。

いろいろな人と出会って，たくさん失敗もしたので，今ではどんなことが起きてもあまり驚かなくなりました。会社で働いていれば，時間をかけて力も注いでいた企画が，ある日突然なくなってしまうなんてこともあります。でも，そんなこともあるかもなと想像しておけば，慌てずに対処することができます。誰かに怒らず，がっかりしすぎず，また前に進んでいく。誰かのせいにして誰かを恨んでもどうにもなりません。最後は「自分が決めたこと」というように割り切るのが良いと思います。

最後に

10代のみなさんは，もしかすると誰かに手紙やハガキを出したことがないという方もいると思います。今日の話を聞いて少しでも興味が出たら，ぜひ，切手を貼ってハガキを出してみてください。日本郵便のウェブサイトで，過去の切手のデザインも見ることができますよ。

（文責：編集部）

インタビューを終えて

［取材協力］
埼玉県在住のラボ会員

大沢和子パーティ
●太田 脩（大学生年代）私たちと同じ年齢のころは美大を受けて浪人されていたことを話してくださいました。自分の夢や目標にまっすぐな方なのだと感じました。その後フリーで活動し，45歳で今のお仕事を始められたと聞いて，あらためて人生は何があるかわからないものだと，人のつながりや学んできたことが，思いもよらぬところでつながっていくのかと思いました。

神奈川かつえパーティ
●草川 萌（大学生年代）来週からフィリピンに行くので，ぜったい切手を買ってきたいと思います。切手デザイナーという仕事は，自分の好きな絵，デザインを描くのではなく，依頼主のニーズに寄りそいながらデザインを考えるものだと知り，それをストレスフルに感じていない貝淵さんの口調や人格に深く感動し，尊敬しました。

髙橋浩子パーティ
●小林柊士（大学生年代）ひとつの切手をつくるのに，デザインを決定する時間をふくめると2年ちかくかかる場合もあると聞き，一つひとつの切手にこめられている思いを強く感じました。「何があっても絶望することはない」とおっしゃっていて，そのことばがぼくにとってとても印象的でした。ことあるごとに落ち込みがちな性格ではありますが，このことばを胸に，前をむいて生きていきたいです。

佐藤尚美パーティ
●石川琥珀（大学生年代）「年賀状を送っていますか？」という質問をされ，ギクリと思ったのと同時に，年賀状だけでなく手紙の送り方もちゃんと理解できていない自分に悔しさをおぼえました。季節やイベントによって切手の絵をつくり，デザインひとつにもデザイナーそれぞれの個性が出ていて，小さい四角のなかに多くの物語がつまっていることを聞くと，切手を集めたくなるし，だれかにその気持ちを届けたくもなるなと感じました。手紙に対して，書くのに時間がかかったり郵便局やポストへ行く手間から，難しさを感じていましたが，その手間こそが魅力だと気づきました。

四元佳奈子パーティ
●四元紗羅（高3）デザイナーのみなさんが，切手をつかう人に楽しんでほしいという強い気持ちをもってお仕事をされていることを知りました。将来デザイン系の仕事をしてみたいと思って美術大学の受験を考えていたこの時期にお話を聞けて，よりデザインをやりたいという気持ちが強くなりました。貝淵さんのように出会う人との縁をたいせつにして，なんでも挑戦していきたいです。

［取材日］2025年5月

ラボ国際交流 50年記念

☆…ラボ国際交流は日本と海外の青少年とホストファミリーが時間をかけて交流を紡いできたプログラムです。

10代で体験した国際交流が，その後の人生にどのような影響を与えているのか。北米青少年受入れプログラムで来日したときの出会いをきっかけに，ラボ・インターンとなり，今はノースカロライナ州でステイトコーディネーターをしているCaitlin A. Clineff氏にうかがいました。

Caitlin A. Clineff
North Carolina State Coordinator
NC 4-H International Exchange Program

My name is Caitlin Clineff, but most people in Labo knew me before I was married, when my name was Caitlin Davis. Now, I'm the State Coordinator for North Carolina, but as a teen and young adult I visited Japan through the month-long exchange program and the year-long Intern program. My time in Japan transformed me into the person I am today, and I'm so honored that I get to facilitate Japanese and American youth and families learning from each other through all of our different programs. I hope someday my 2-year-old son can participate!

2005年，北米ユースとして参加しただいせんサマーキャンプ

2009年，スタッフとして参加しただいせんウインターキャンプ

20 years ago, I met a Labo intern at Daisen Summer Camp. He talked about the Intern program, and it sounded so amazing that I made it my goal to become a Labo intern. 4 years later, I recited part of "JUGEM" in my intern interview, which I still remembered from camp! Returning to Daisen as a staff member for winter camp was a different experience—very cold and early mornings!—but I have wonderful memories of working with the Senior Mates, College Mates, and staff there, playing in the snow and singing around the bonfire. A big cultural shock was that Christmas Day happened during the camp, and it was just a regular day. How strange it felt for me not to celebrate the biggest American holiday!

Today, I use my experiences to help host families understand their delegates' perspectives and to help the delegates understand American culture and differences in family dynamics. I can relate to Japanese delegates and year-long students by sharing stories about how I adjusted to living with host families and working in a Japanese office. My host families in Japan were all so wonderful, patient, and generous, and my goal is to give Labo delegates the same warm welcome in the U.S. With patience, flexibility, and understanding, we can all live together peacefully.

【要約】

私は10代のころに，１か月のホームステイプログラムと１年間のラボ・インターンプログラムで日本に滞在しました。その経験がいまの私をつくっています。いつか私の息子も成長し，このプログラムに参加できることを願っています！

20年前，ラボのサマーキャンプでラボ・インターンに出会い，私もなりたいと強く思いました。４年後のラボ・インターンの面接試験では，そのときのキャンプで覚えた『寿限無』の一節を披露しました。

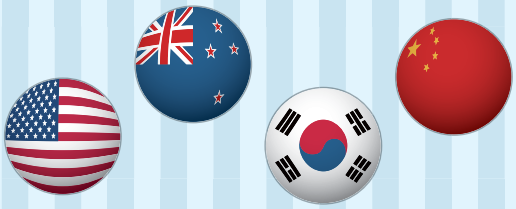
ラボ・インターンとして戻ったラボキャンプには，たくさんの思い出があります。キャンプ中にクリスマスがきましたが，ただの「ふつうの日」だったのには驚きました。アメリカではいちばんの祝日なのに！

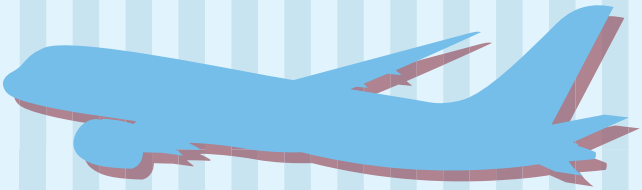
現在，私は自分の国際交流経験をいかし，コーディネーターとしてホストファミリーとラボの子どもたちが，文化や視点の違いをお互いに理解しあえるようサポートしています。私の日本のホストファミリーがそうだったように，ラボの子どもたちをあたたかく迎え入れたいと思います。忍耐と柔軟性，そして理解があれば，私たちはともに平和的に歩んでいくことができると思うのです。

2025年夏，ノースカロライナ州にてステイしたメンバー

地平線白書

2025 夏のラボ国際交流





2025年夏，ラボ国際交流プログラムで493名が海外へ渡り，53名が受入れプログラムで来日しました。新しい環境でさまざまな人に出会い，挑戦し，どのようなことを感じたのでしょう。夏の国際交流体験談を7名からリポートしていただきます。

北米交流

何でも自分の考え方しだい

吉岡愛衣（中３／宮城県・吉岡香織Ｐ）

期間：7/21～8/17

ホームステイ1日目，シャワーのお湯がとても熱く，驚きました。初日にいきなり「温度が高い」と言ったら，わがままに思われるかもしれない，と迷いましたが，Momが「家族の一員として受け入れた」と言ってくれたおかげで自分の状況を伝えることができ，気持ちよくシャワーを浴びられるようになりました。そこから，わからないことはちゃんと質問できるようになりました。

また，ホストフレンドのMisaは働いていたので一緒に過ごす時間が少なく，最初はさみしかったです。でも，夜にその日のことを話したり，好きな映画を一緒に見たりする時間がとても幸せで，会える時間が楽しみになりました。Misaがいない時間も近所の子たちや犬と遊んだり，教えてもらったウクレレを弾いたりして過ごしていると毎日が楽しくなり，なんでも自分の考え方しだいだと感じました。

おみやげを渡したときに，“I like it!” と言ってくれたことがうれしく，自分もつかうようになりました。言った人も言われた人も笑顔になれることばだと思います。ほかにも，ホストファミリーがよくつかう “just a little” “（犬に）good boy!” などを覚えると，とても便利でした。

ホストファミリーや支えてくれたたくさんの人たちに感謝しています！

●困ったこと

アルバム，素がたり，おみやげを出すタイミングに迷った。ご飯のあと，家族みんなが集まったときや，最後のほうに “Japanese day” をつくって，たくさんおみやげを渡した。

●がんばったこと

食器洗い，洗濯物をたたむ，犬の餌を詰め替えるなど，できそうなことを見つけたらなんでもお手伝いをした。お手伝いをすると家族の一員と認めてもらえた感じがしてすごくうれしかった。

ニュージーランド交流

たいせつなことは変わらない

西川実穂（高１／千葉県・佐藤志津子Ｐ）

期間：7/23～8/15

ニュージーランドでの学校生活は，もともとこの学校に通っていたと思うくらい安心感がありました。いちばん大きな存在はスクールバディ。私にいろいろ質問をしてくれたけれど，最初はYesかNo，または簡単なフレーズでしか答えられませんでした。それだけではコミュニケーションができないと思って，モーニングティーやランチの時間もかならずバディと一緒にいて，質問の答えにひと言加えたり，私からも質問したりしていたら会話が増えて，共通の趣味もみつけることができました。

スクールバスでも友だちがたくさんできました。朝から明るく話しかけてくれて，毎日が楽しかったし，英語も上達した気がします。放課後や休日に秘密基地に連れていってくれたり，Tag（鬼ごっこ）をして遊んだりしました。

国際交流をとおして，いちばんたいせつだと思ったのは「感謝」です。“Thank you.” と伝えたら，自分の気持ちを伝えられた気がしたし，相手も笑顔になりました。たとえ国が違っても，生活するうえでたいせつなことってそんなに変わらないんじゃないかなと思いました。

みんなのおかげで成長できて，充実した最高の夏になりました。あらためて感謝を伝えたいです。

●うれしかった

スクールバスの友だちにミサンガ，五円玉，紙風船などの日本のおみやげを渡したらとても喜んでくれて，お返しにプレゼントをくれた！　感激した。

オレゴン国際キャンプ

英語が好きになった

高木新悟（中２／滋賀県・川嶋淳子Ｐ）

期間：7/21～8/12

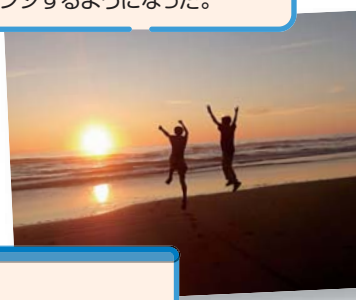
オレゴン国際キャンプで発見したことは，世界は広くてまだまだ知らないことがたくさんあること，世界にはいろんな人がいて，それを認めあっていかなければならないこと，などです。自分のまわりにはいないようなタイプの人とも３週間の集団生活を送るので，みんなが笑顔で過ごすためには，違いを認めて，受け入れる必要がありました。

アンバサダー（現地の参加者）のザンダとカヌーに乗ったとき，日本語の「倒木」と「倒壊」の違いを教えて，ザンダからは「break（壊す）」という単語や，虫や魚の英語名を教えてもらいました。アンバサダーは日本語を話せる人もいたので，最初はラッキーと思っていました。でもキャンプをとおして英語が好きになって，もっと英語を話したかったなと感じています。

海洋エリアでは船に乗ってホエールウォッチングに行きました。山歩きはめっちゃきつかったけど，終えた後の達成感がすごかったです。歩きながら，キャンプを主催するOMSI（オレゴン科学産業博物館）のスタッフが動植物の名前を教えてくれたのも印象に残っています。いつか自分の力でまた海外に行ってみたいです。

●参加前と変わったところ

このキャンプをとおして外国の人と話すことへのかべがなくなった気がする。同じ宿泊施設にいた外国の人に気軽に話しかけたり，もっとチャレンジするようになった。



●時にはあきらめもだいじ

ぼくが国際交流に参加しているあいだ，日本では部活の大会があった。ぼくの代わりに友だちが出場して入賞していたことを知り，本来ならば自分が立っている場所だったのに，と悔しくなった。でもぼくは国際交流でとても良い経験ができたし，行って良かったと心から思っている。

韓国交流

10日間の大きな経験

河野杏維（中１／東京都・越智和代Ｐ）

期間：7/22～7/31

行く前は不安と緊張でいっぱいでした。でも，ホストファミリーとどんな会話ができるか，どんな場所で，どんな生活を送るのか，いろんなことを考えていくうちに楽しみに変わっていきました。

ホストフレンドのGyu Miとは会ってすぐに仲良くなり，ホストファミリーも私のことをあたたかく受け入れてくれました。韓国では２泊３日のラボキャンプがあり，ソングバードを踊ったり，ロッジ活動でゲームをしたり，たくさん遊んで盛りあがりました。キャンプから帰ってきてからホストとチムジルバン（韓国の入浴施設）に行ったり，買い物をしたり，楽しい時間はあっという間に過ぎてしまいました。

初日は韓国語も聞きとれなくて，なんとなくYesかNoで答えていて，会話がすぐに終わってしまっていました。けれど，だんだん韓国語が聞きとれるようになってきて，ジェスチャーやちょっとした韓国語と英語の単語だけでも，たくさん話すことができるようになり，すごく仲良くなれてすごく楽しかったです。たった10日しかないけれど，別の国で過ごしたことは大きな経験になりました。

●ことばが伝わってくる

最初はまったくことばがわからなくて，翻訳アプリを使って話していた。ラボキャンプに行くとまわりがほとんど韓国語で話すから，たくさん韓国語を聞いているうちに，話している内容がわかるようになってきた。

●韓国語で言ってみた

私とホストでチヂミを作ったときに，ひっくり返すのが難しくて，覚えていた「어려운(難しい)」をつかってみた。韓国語の発音があっていたかわからないけれど，ホストが「한국어 잘해요(韓国語じょうず!)」と言ってくれてうれしかった。

北米青少年受入れ

私のもうひとつの旅

森井涼葉（高２／愛知県・加藤ひろみＰ）

来日者：Amelia（18歳）　期間：7/11～8/7

Ameliaは，おいしいものを食べたり嬉しくなると踊り，自分の知っているうたが聞こえると歌ったりする，ことば以外でのポジティブな自己表現をする女の子でした。最初はびっくりしましたが，私も一緒に積極的な表現をできるようになりました。

一方で，いちばんありのままでいられる家が，英語をつかい，文化の違いを受け入れなければならない場所に変わった，と負担に感じた時期もありました。そのときは，別の部屋でそれぞれ自分のことをしたり，一緒に行ったラボキャンプで他の子ともたくさん関わったことで，冷静に自分と向きあうことができ，Ameliaを「ゲスト」ではなく「家族」として受け入れられるようになっていきました。最後には，隣にいると安心する存在になったのです。同時に，私が北米交流に参加したときのホストフレンドが，私との時間にどれほど向きあってくれていたかを実感できました。

２度の国際交流を経て，私は異文化をもつ人を受け入れることや自己表現のたいせつさ，また，家族になるとはどういうことなのかを理解しました。ホームステイとは，行く人にとっても，受け入れる人にとっても「ひとり立ちへの旅」であることがわかりました。

家族より

小学5年生の息子は，家族間の会話がほぼ英語になり，ときどき浮かない表情を見せていましたが，一緒に歌ったり踊ったりすることで，彼なりにAmeliaとの接し方を見つけだしていました。Ameliaが「彼はことばはあまり話さないけれど，内容をだいたい理解していることが表情からわかるよ!」と言ってくれたことに感激しました。Ameliaから“Thank you!”には「親しい関係なら“Um-Hum!”と返す」と教わりました。子どもたちが心を通わせて“Um-Hum!”と気持ち良くいいあえる関係を，国内外問わず，出会う人たちと築けることを祈っています。

日本語研修生受入れ

娘にとって姉のような存在がいること

松澤ひかる（保護者／東京都・三井麻実Ｐ）

来日者：Daisy（15歳）　期間：6/13～7/11

Daisyはシャイであまり表情が変わらない子でした。「何でもいいよ」と，自分の主張がないことに最初は戸惑いましたが，好きなことや好きな食べ物のことを聞いて，一緒に食べに行ったりしているうちに，笑顔が増えてきました。1週間くらいたったころ，Daisyが私たちと話すときと，他の人と話すときとでは表情が違うことに気づき，Daisyが家族になじんできたことを実感しました。

私も夫も英語がうまく話せませんが，２歳の娘にとって良い経験になるならやってみよう，と受入れをしました。娘はDaisyに日本語の絵本を読みきかせてもらい，手をつないでお出かけをしました。Daisyと一緒にお好み焼きを食べに行きましたが，娘にとっても，はじめてお店でお好み焼きを食べる体験になったのがよかったです。

Daisyは平日は日本語研修に通うため，一緒に過ごせる時間は夜と週末だけで，1か月はあっという間に過ぎました。いまでも娘はときどき「Daisy」と口にします。娘にとって姉のような存在が海外にできたのが，とても良いことだと思います。

中国青少年受入れ

実際に会って話してみないと！

河本香菜（大学生年代／東京都・伊藤祐佳子Ｐ）

来日者：思彤（17歳）　期間：7/25～7/29

私は大学で中国語学科に所属しており，大学生活のまとめとして受入れに挑戦しました。もっとも印象に残っているのは，中国の文化を間近で感じられたことです。受け入れたリュウちゃんはどのお店でもたくさんの買い物をしていて，私の好きなお菓子や化粧品もたくさん買っていたことがとてもうれしかったです。K-POPも大好きで，毎日のようにタワーレコードにも行きました。中国にはCDショップが少なく，手に取ってCDを買えるのが楽しかったみたいです。

この受け入れをとおして感じたのは，「実際に会って話してみないとわからない」ということです。偏見や先入観をもつこともありますが，直接関わることでその国の人の考え方や魅力をほんとうの意味で理解できるのだと感じました。また，リュウちゃんは将来，日本の大学に進学することを目標としており，日本に住みたいと話してくれました。日本に住みたいという夢をもち，日本のことを好きだと言ってくれたことがとてもうれしかったです!!

ラボ国際交流プログラムに参加しませんか？

ラボ国際交流には，海外にホームステイするプログラムと，来日者を家族として受け入れるプログラムがあります。プログラムによって参加対象年齢や地域が異なりますので，詳しくは事務局までお問合せください。

2026年　ラボ国際交流プログラム予定

訪問プログラム

- 北米交流
- ニュージーランド交流
- オレゴン国際キャンプ
- 中国交流
- 韓国交流

受入れプログラム

- ニュージーランド青少年受入れ
- 日本語研修生受入れ
- 北米青少年受入れ
- 中国青少年交流受入れ
- 韓国青少年交流受入れ

2025 S4-H Fall Coordinators' Conference報告

ラボ国際交流開始時からの交流団体であるStates' 4-H International Programs（S4-H）が主催する「2025 Fall Coordinators' Conference」が開催されました。ラボ国際交流センターからは4名のスタッフと，財団会員を代表して船田奈緒美ラボ・テューター（大阪府）が参加しました。

日程 2025年11月12日～14日
場所 アメリカ・ワシントン州シアトル

S4-Hとの合同会議では，課題の多かった今夏の交流をふり返り，来夏にむけて意見交換をおこないました。

2日目は各州のコーディネーターや各国国際交流団体から約50名が集まり，ワークショップをおこないました。関西のラボ・テューターの協力を得て準備した，船田奈緒美テューターによる日本文化紹介（うちわづくり）をとおして，たくさんのコーディネーターと親交を深めることができました。

来夏の国際交流も安全に，かつ青少年の成長に資するプログラムにすることを，日米双方の出席者で確認しあう会となりました。

全体会では，4Hのプログラムでアメリカに留学中のラボ高校留学生が選ばれてスピーチをおこないました

船田奈緒美テューターが，「日本の英語教育と，国際交流における青少年の成長」についてプレゼンテーションをしました。

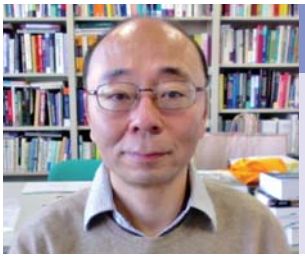
ラボのスローガンである「ことばがこどもの未来をつくる」を信じ，ラボ・テューターとして子どもたちのことばとこころをはぐくんできました。ラボでは①英語をつかう必然性のある活動　②間違いを恐れない環境づくり　③異年齢・異文化交流の推進　をとおして，「自信」「主体性」「柔軟性」を養い，「人と人との関係のなかで育つことば」の獲得をめざしています。これからの時代，世界中の人々と協力して課題を解決していくには，「ことばの力」「文化を理解する力」「自ら動く力」が欠かせません。ラボと4Hとの国際交流は「実体験を通じて人を育てる」という共通の思いのもと，ともに生活し，笑い，挑戦し，理解を重ねることで，これらの力を育てています。私たちおとながこのチャンスを子どもたちに提供し続ければ，未来はかならず明るくなると信じています。

一般財団法人ラボ国際交流センター 理事会・評議員会報告

11月20日（木）に，理事会と評議員会の合同会議が対面とオンライン併用で開催され，理事11名中7名，評議員9名中2名，監事1名が参加し，議決権行使書と合わせて審議がおこなわれました。主たる議題は第54期上半期事業報告で，今夏実施の諸外国訪問プログラム，諸外国の受入れプログラムのようすが，写真やビデオを交えて報告されました。また，普通会員のラボ・テューターの代表が，自分が送り出した参加者の成長のようすを写真とともに報告。理事，評議員より，この交流が青少年の成長に資する姿がより具体的にわかったとの感想がありました。その他，会員の承認，役員の職務執行報告など，全議案が異議なく承認されました。

東京言語研究所コラム

文法と意味，文法の意味



西村義樹

東京言語研究所運営委員長。東京大学文学部（言語学研究室）教授。1989 年東京大学大学院人文科学研究科博士課程（英語英米文学専攻）中退。著書に『構文と事象構造』（共著／研究社），『認知言語学 I：事象構造』（編著／東京大学出版会），『明解言語学辞典』（共編著／三省堂），『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ：生成文法・認知言語学と日本語学』（共編著／開拓社），『メンタル・コーパス：母語話者の頭の中には何があるのか』（共編訳／くろしお出版），『認知文法論 I』（編著／大修館書店），『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』（共編著／開拓社）など。

みなさんは「文法」にどういうイメージをもっているでしょうか？「ラボの世界」の読者にはさすがに文法嫌いは多くない気もしますが，洋の東西も老若男女も問わず，私のような根っからの文法好きは完全な少数派のようです。私のような人間がかならずしも変人であるとは限らないことがわかるようなお話をさせていただこうと思います。

ラボとも関係の深かった言語学者の鈴木孝夫先生が，英語推理小説の訳書で「オレンジ色の猫」という表現に遭遇し，そんな色の猫がいるのかと不思議に思って調べてみたところ，原書の an orange cat の orange は＜オレンジ色＞ではなく＜明るい茶色＞を指すことがわかりました。スペクトルのなかで英語の orange と日本語の「オレンジ色」が指せる範囲が，（焦点色と呼ばれる）中心では重なっているものの，全体として合致しているわけではなかったのです。

同じことが文法についてもいえます。たとえば，日本語の受動文「太郎は花子に叱られた」が記述する事態は英語でも受動文で表現できますが，「太郎は花子に泣かれた」に直訳的に対応する英語の受動文は存在しません。本来受動文とは，主語がさす人やものが動詞のあらわす行為によって影響を受ける，という意味を伝えるための仕組みです。「太郎は花子に叱られた」の場合，対応する能動文「花子は太郎を叱った」も＜太郎が影響を受けた＞という意味を含んでいます。こういう場合には，英語でも同じように受動文を用いることが可能です。それに対して「太郎は花子に泣かれた」に対応する能動文「花子は泣いた」には太郎はそもそも登場しません。「太郎は花子に泣かれた」に含まれる太郎が受けた影響とは，花子が泣いているところに居合わせた太郎が経験した迷惑感だと考えられますが，受動文を用いてこのような迷惑感をあらわすことができるのは英語にはない日本語の個性だといえます。

「村上春樹を読んだ」という文の意味がわかる人はこの場合の「村上春樹」が，そういう名前の作家ではなく，その作家の書いた作品を指していることがわかっているはずです。英語の beads は現在では＜数珠玉＞を意味しますが，その元になる bedes は本来＜お祈り＞という意味でした。昔の教会では同じお祈りをくり返し唱えるという慣習があり，手に持った数珠の玉を数えることによってお祈りの回数を把握していました。この場面では＜お祈りを数える＞のと＜数珠玉を数える＞のとが同じ行為であったため，beads が＜数珠玉＞を指すのに用いられるようになったわけです。このように，ある表現を用いてその表現が通常または本来指すものと密接に関係した別のものを指すという現象はメトニミー（metonymy）と呼ばれ，どんな言語にも広く見られることがわかっています。

メトニミーは文法とも深く関係しています。ひとつだけ例を挙げましょう。一見同じ意味をあらわすかに思われる以下の２つの文

(1) It is difficult to read this book.

(2) This book is difficult to read.

の主語が異なっているのは，(1) の difficult が＜この本を読むこと＞の難易度が高いことを意味するのに対して，(2) の difficult があらわすのは＜この本＞がそのような難易度の原因となる特性を有することだからであると考えられます。この２つの difficult の用法が意味の焦点とする特性の間には前者の原因が後者である，という密接な関係が成立していることと，いずれの文においても焦点となる特性の持ち主が主語として表現されていること，に注目してください。

Go Ahead! No.188

ことばを超えて心を伝える

脇田雅美
会社員

2001 年，中学１年生のときにアメリカ・サウスダコタ州にホームステイしました。草原のなかにある，まるで『大草原の小さな家』のような家庭でした。毎朝ホストフレンドとともに動物の世話をし，ときには馬に乗って遠くまで出かけました。ことばはわからなくても，いつの間にかお互いに何を話しているのか理解できた気がします。この１か月は，人生でいちばん自分の気持ちを伝えようと努力した期間だったかもしれません。

2005 年，ラボ高校留学に参加し，カナダで１年間を過ごしました。日本の社会では，周りに合わせることや集団行動が求められる場面が多いですが，カナダではより個人が尊重されていると感じました。たいせつなのはことばを話せるようになることではなく，そのことばに気持ちや考えをのせて伝えることだということを学びました。

その後，大学で中国に１年間留学し，大学卒業後はブラジルで半年間過ごしました。日本に帰国後は台湾資本の会社に就職し，現在はアメリカ本社の日本法人でロジスティクスマネージャー（国内・国際物流および倉庫管理のマネジメント職）として働いています。

国際物流の世界では，各国それぞれにルールがあり，ひとつの貨物を輸出入するにも事前の調整が欠かせません。さまざまな背景をもつ人たちと関わるなかで感じるのは，彼らが自分の利益や意見をしっかり主張してくるということです。そのなかで調整をおこなうには，言語を使いこなせることはもちろんですが，対立を恐れずに自分の意見を伝えることがたいせつです。日本人同士であれば，空気を読みあい，阿吽の呼吸で物事が進むこともあります。これは決して悪いことではなく，日本の長い歴史のなかで培われた日本人らしさだと思います。しかし，異なる背景をもつ人との間では通用しません。

みなさんも恥ずかしがらずに自分の意見をどんどん発信してください。同調圧力に屈せず，人と違う行動をしてもかまいません。それがたとえ間違っていたとしてもだいじょうぶです。何もいわずに周りに合わせるよりも，「自分はどう思うか」「自分はどう考えているか」を伝えることがたいせつです。

これは外国語が話せるかどうかの問題ではなく，自分のなかに積み上げてきた知識や教養があるかどうかの問題だと思います。それらが自分のことばとなり，自信となります。

ことばはツールです。そこにあなたの気持ちをのせましょう。たいせつなのは，あなたの人間性であり，あなたのなかから紡ぎ出される思いです。

わきだ まさみ＝外資系家電製造業日本法人勤務　ロジスティクスマネージャー
（岐阜県・藁谷昌夕実パーティ OG）

Information

＜国際友好親善事業＞

■ニュージーランド青少年受入れプログラム
日 程：2025 年 12 月 12 日 ～ 2026 年１月５日

■ラボ中国青少年交流
日程：2026 年３月 25 日～４月３日

＜東京言語研究所＞

■集中講義
2026 年３月 14 日・15 日
講師：野矢茂樹（立正大学教授）
演題：未定

■春期講座
2026 年４月 11 日・12 日
要項掲載開始予定：2026 年２月中旬
申込開始：２月下旬

■理論言語学講座
2026 年５月開講
要項掲載開始予定：2026 年３月上旬
申込開始：３月下旬

※詳細については東京言語研究所ウェブサイトに掲載します。
https://www.tokyo-gengo.gr.jp/

＜事務所移転のご案内＞
2025 年 12 月より（一財）ラボ国際交流センターは下記の住所に移転します。連絡先の変更はございません。

〒160-0023
東京都新宿区西新宿３丁目９－２
イマス西新宿第一ビル ８F

「ラボの世界」第 311 号／発行所：一般財団法人ラボ国際交流センター　〒 169-0072 東京都新宿区大久保 1-3-21　TEL.03-6233-0630　FAX.03-6233-0633
発行人：林 浩司／発行日：2025 年 12 月 4 日（年 4 回発行）